

演習授業における Facebook の活用実践

加藤 智也

名古屋芸術大学 人間発達学部

t-kato@nua.ac.jp

概要：Facebook を少人数でのゼミナールにおいていち早く検討・導入してきたことから、その実践について「情報共有」「学習意欲」「関係構築」の観点より考察する

1 はじめに

ソーシャルメディアが情報発信やコミュニケーションの社会インフラとして機能しはじめた知識基盤社会においては、ソーシャルラーニングという SNS 等を活用して参加者同士がインターネットを通じてインタラクティブに教え合い学び合う学習形態が期待されている。

本研究では日本ではまだ広く普及していない 2010 年より Facebook を演習授業（少人数でのゼミナール）においていち早く検討・導入してきたことから、その実践について他のツールと比較しながら考察する。Facebook をゼミナールに取り入れることにより、情報の共有を効率化し、学生の学習意欲を向上させ、さらにはゼミナール内での人間関係を構築するのに役立つものと考えられる。

2 ゼミナールにおける情報共有・コミュニケーション

従来ゼミナールでは授業を補完するものとしてメール、メーリングリスト、ホームページを活用してきた。これらの IT ツールを駆使することにより、授業時間外に指導・学習・連絡ができるため、週に一度開催されるゼミナールの時間を有効に活用することができた。しかし、IT ツールが複数に跨ることにより一元的な管理が難しく、教員にとっても学生にとっても使い勝手の面ではよいとはいえなかった。また、教員が学生へ連絡した場合、必ず読んだ旨を返信するよう指示してはいたが、それを怠る学生もいてスムーズな連絡手段ではなかった。また、学生が自由に情報を発信してメンバー全員で共有がしづらかったため、自発的な学習や意欲といった面においては効果に疑問があった。そして、教員と学生のコミュニケーションはある程度促進されるが、学生同士のコ

ミュニケーションへの発展は難しかった。

そこで、Facebook の実名制のリアルなつながりを前提とした信頼性およびグループ機能やメッセージ機能に着目した。Facebook のグループ機能は、クローズドな掲示板形式の環境で情報共有・コミュニケーションするだけのシンプルなサービスである。特に更新通知機能が優れており、学生同士のコミュニケーション・ディスカッションが促進されることを期待した。そして、開封済機能があり、メンバーの誰が読んだのかがリアルタイムに把握でき、メールと違って確実性があり情報伝達洩れを防げると考えた。また、グループ機能はゼミ学生のがほとんどが所有するスマートフォンの Facebook アプリにも対応しており、非常に利便性が高いと考えた。Facebook のメッセージ機能は、特定の個人に直接連絡を取りたい場合に利用でき、内容を見られるのはメッセージを送った人だけなので、メールの代わりに利用できる。メールと違いアドレスの管理が不要であり、また開封確認ができるため、情報管理および情報伝達において非常に有益であると考えた。

3 Facebook の運用方針の明確化と事前指導

ゼミナール内で利用する主な機能はグループとメッセージである。グループはゼミナール学生全員で共有すべき内容、メッセージは学生個人のみに関わる内容について利用した。

教員からグループ向けに投稿する内容としては、主に次回ゼミナールまでにすべき課題に対する指示、ゼミナール内で説明に利用したスライド、今後のゼミナール予定、学生の成果物に対する評価・コメント（ゼミナール全体に有益なもの）、研究に役立つ情報である。学生がグループ投稿を確認したら必ず速やかに了解を意味する「いい

ね！」を押すもしくはコメントをして読んだことを教員に知らせることを義務づけた。

学生からも自由にグループへ投稿することを許可し、ゼミナール内での議論を活発かつ有効なものにするためゼミナールでの発表前に概要の説明をグループへ公開したり、研究の過程で各自の成果物に対する他のメンバーから評価・感想をコメント機能を通じて得たり、学生主体でゼミナール全体の企画をたてたりするなど、積極的な活用を促すこととした。

教員から学生への個別メッセージはなるべく最小限とし、やむを得ない急ぎの場合のみ活用し、基本的には学生からの連絡に対するレスポンスに活用した。学生が教員にメッセージを活用するケースとしては、ゼミナールの欠席連絡、簡単な質問・相談、対面で相談する必要がある場合の日時調整などがある。

運用を開始するにあたり、まずは教員から Facebook について特徴やリスクの説明を学生に行い、ゼミナールでの必要性および活用方針について周知した。その後、パソコンから一斉にアカウント登録をさせ、さらにスマートフォンアプリを導入させた。そして教員を検索・友達申請をさせ、教員があらかじめ作成した秘密のグループへ招待し運用を開始した。

4 ゼミナールにおける Facebook 活用実践に関する考察

○効率的な情報共有

ゼミナールに関する情報はなんでも Facebook で一元管理されているため、スマートフォンさえあればいつでもどこでも確認ができるため、非常に学生からも評判がよかった。Facebook の情報はストックされるため、Twitter などのフロー型サービスと比較し情報の一覧性・検索性に優れ、またメールと比較しても学生ごとにメッセージが自動で仕分けされるため管理も容易である。そして、メールアドレスの管理をする必要がない。学生は頻繁にメールアドレスを変えることがあり、その都度教員がアドレス情報を更新する必要があり非常に煩わしかった。さらに、ホームページと比較しても更新の容易性、確実な更新通知、了解確認など優れた面が多かった。

○学習意欲の向上

ゼミナールで発表する学生は自分の発表の1週間前までに Facebook グループに発表テーマおよ

び概要を公表し、発表者以外の学生はそのテーマについて予習しておく。そうすることにより、ゼミナールでのディスカッションが活発化し、予習でわからなかった点などを全員で補足しながら理解を深めていくことができた。そして最後に発表者は使用したスライドをグループに公開し、教員および発表者以外の学生はコメントを記入することにより、発表者は達成感を得たり反省をすることになり、また発表者以外の学生は自分の考えを整理する機会となった。グループ上に記録として残るため安易な発言は見られず、また学年の垣根を越えることで適度な緊張感が生まれ、責任をもって取り組む姿勢もみられた。そういったルーティンを確立することにより、学生が自ら考えて能動的に取り組み、さらにゼミナールに対して強い参加意識をもつようになった。そして、ゼミナールでの対面の授業を補完するものとして有効に機能し、また研究のプロセスを全体で可視化することにより生産性の高い指導ができたと考えられる。

○ゼミ生同士のリアルな関係構築

Facebook グループでの活発なやりとりは、Facebook のみの関係を超えてリアルなコミュニケーションへと発展した。同級生同士では Facebook 導入前において見受けられたほぼ限られた友達のみとのコミュニケーションが改善され、個々の研究についてもゼミ生全体のこととして興味・関心をもってお互いに助け合いみんなで解決していこうという姿勢がみられた。また、上級生は下級生への見本となるという意識も芽生え、縦のつながりが強化されるとともに、ゼミナール時間外で親交を深めるといったリアルな人間関係構築に役立ったといえる。

5 おわりに

ゼミナールにおいて Facebook の活用を実践してきた結果、メンバーに好意的に受け取られ、無料で手軽に活用でき使い勝手も良く、特にグループ機能やメッセージ機能において、情報共有の効率化や学習意欲の向上、メンバー内でのコミュニケーションの促進にその有効性を確認することができた。

参考文献

- [1] トニー・ビンガム他、「ソーシャルラーニング入門」、日経 BP 社、2012